歴史講座

4回-2

平家物語

今回は、那須与一の談であります。屋島の合戦のさなか。パパンパン

阿波・讃岐の豪族たちは次々に平家を背き、源氏に従い着きます。

義経軍はいつの間にか三百余騎に膨れ上がりました。

平家は海にズラリと舟を並べ、源氏は陸地に陣をしいての膠着状況。

テレビドラマで言うと、ここから交渉が始まるという場面ですが、今と違って拡声器もなければ携帯電話もない時代。ましてや大砲やミサイル・ロケットランチャーなどもありません。

夕暮れになり、「今日の戦は終わりだ」という頃に、沖から一艘の小舟が近づいてきます。

「ん、なんだあれは？」と源氏方が見ていると、舟には二十歳前の女官が乗っており、船板に棒を立てた先に扇を挟んで、源氏方に手招きしています。

義経は後藤兵衛実基を呼び、「あれは何の真似だ？」と尋ねます。

後藤兵衛実基は、「うまく射ぬいてみよ、ということでしょう。ただし、大将軍自ら矢面に立ち、相対するならば、腕達者な者に狙撃させようという計略と思われます。・・・そうは言っても、やはり敵の挑戦。扇を射させるべきでしょう」

昔の戦いというものは今と違ってユーモアがあり、のんびりムード。パパパンパン

「誰かおらぬか？」

こうして召し出されたのが、空飛ぶ鳥も三羽に二羽は必ず射落とす、下野国の住人、那須与一宗高でした。

義経　「どうだ宗高、あの扇の真ん中を射て、平家に見物させてやれ」

与一　「成功は約束できないところです。射損ずれば後々まで御味方の名誉の傷となりましょう。私などより、もっと確実な方にお命じになったほうがよかろうと思われます」

これを聞いた義経は怒ります。

「ひとたび鎌倉を発って西国へ赴いたからには、義経の命は絶対である。少しでも不満のある者は、さっさと立ち去れい」

そこまで言われては仕方無いと、与一は扇の的を射抜く決意をします。

与一は黒く逞しい馬に乗って水際へ乗り出します。

与一は馬を一段（約11㍍）ばかり海へ打ちいれます。

扇の的まではまだ七段ほどもある上、二月十八日（旧暦）酉の刻（午後六時）のことではあり、風は激しく波は荒れ、扇の的はひらひらと風にはためいています。

ん、何故わかるかって？・・・平家物語に書いてあります。それに、気象庁のスーパーコンピュータを使えば、過去の天気や風の向き潮の流れまで予測できちゃいます。

パパンパン

話を戻しまして、沖には平家が船を並べて見物し、陸地には源氏が馬の首を並べて見物しています。「特設席のチケットはいかがですか～弁当付きですよー」なんて、チケット売りが居たかどうかは解りません。パンパンパン

沖を見ても、陸地を見ても、まさに「晴れの場」です。

与一は目をふさいで祈ります。

「南無八幡大菩薩。わが故郷下野国の神、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神。どうか、あの扇の的を射させてください。もし射損ずるなら、弓を切り折り自害して、人に再び顔向けしない覚悟です。今一度那須へお帰しくださるおつもりならば、この矢を外させないでください」

与一が目を開くと、風が吹き弱り、扇の的が射やすくなっていました。

与一は鏑矢を取り、ひき絞ってピシッと放ちます。

与一は小柄ながら腕力が強く、十二束三つぶせの強く放った矢は浦々いったいに響き渡るほど風を切って飛んでいき、見事扇を射抜きました。

沖の平家も、陸地の源氏も、いっせいに大喜びしました。

宮崎駿の平成ポンポコたぬき合戦の一場面を思い浮かべるのは、私だけでしょうか

那須与一の一説でした。

パンパンパン

毎月第3木曜日に、時間軸空間軸が絡む六条公民館から平安時代・鎌倉時代へタイムスリップしませんか！

旅行代は無料です。

事前申し込みもありません。当日時間までに直接お越し下さい。席には限りがありますので、お早めにお越し下さい。時間になり次第、異世界へと出発いたします。

なお、時間旅行につきましては、当日の合戦の模様などにより身の安全を考慮して、源氏日報の場面とは必ずしも一致しませんのでご理解・ご協力の程よろしくお願いします。

六条公民館長　長塚　茂